レポート

世界遺産認定後の産業遺産の現状と課題
～『石見銀山遺跡とその文化的景観』を事例に～

はじめに

今年（2015年）の６月28日から７月８日にかけてドイツのボンで開催されたユネスコ（国際連合教育科学文化機関）の第39回世界遺産委員会にて、わが国推薦の『明治日本の産業革命遺産製鉄・製鋼、造船、石炭産業』が世界文化遺産として新規登録され、長崎県初の世界遺産が誕生した。この『明治日本の産業革命遺産～』は、その名の通りいわゆる産業遺産であり、姫路城や富士山などのように見た目だけでそれとわかるものではなく、世界遺産として理解するには観る方もある程度の知識を持たねばならない。

そこで本稿では、産業遺産としてアジア初の世界遺産に認定されてから８年が経過した『石見銀山遺跡とその文化的景観』の現状を参考に、産業遺産の世界遺産認定後を考察する。

Ⅰ．『石見銀山遺跡とその文化的景観』について

１．概要

石見銀山遺跡は、島根県の中西部、大田市にある16～20世紀にかけて約400年に渡り採掘された世界有数の銀鉱山の遺跡である。鉱山の麓には、掘削に従事する労働者や鉱山経営者等関係者に加え、彼らを相手とする商人など最盛期には人口20万人、寺院百カ寺と伝えられる大森町（現在の大田市大森町）が発展した。

２．歴史

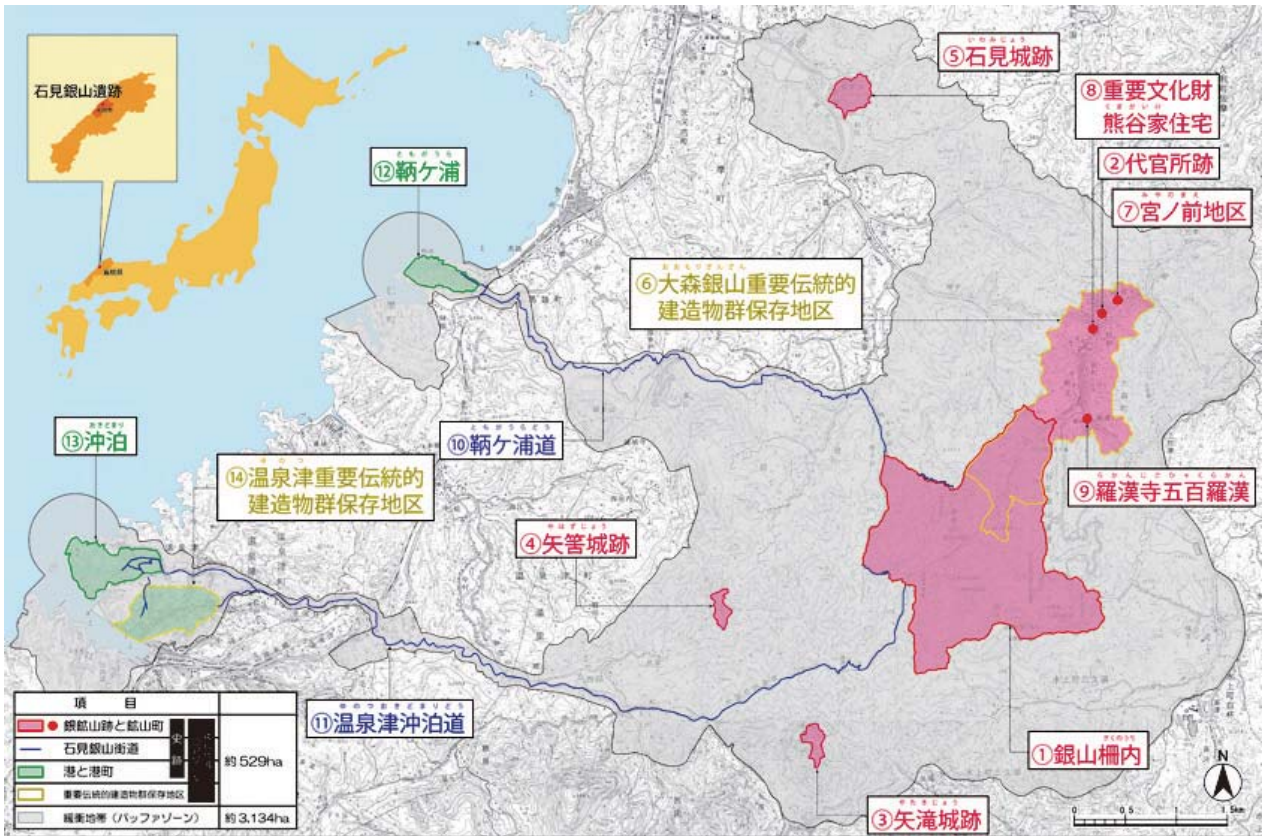
石見銀山は、鎌倉時代には発見されていたが、その本格的な開発は、室町時代の1526年に博多の豪商・神屋寿禎（かみやじゅてい）が再発見してからとなる。その後、毛利氏と尼子氏の争奪戦の末、毛利氏の支配下となったが、「関ヶ原の戦い」の結果により江戸幕府が開かれると、奉行所が直接支配する天領となり、幕府の財政に貢献した。江戸初期を過ぎる頃からは銀の産出量が減少し始め、その質も低下したが、明治の廃藩置県では“大森県”が置かれるなど、町の繁栄は続いた。しかし、民間経営となった銀山が経営会社の不振から休山となり、昭和初期には銅の採掘が試みられたものの水害が発生、その採掘の歴史にピリオドを打ったことで、大森の町も衰退していった。

３．世界遺産に認定

『石見銀山遺跡とその文化的景観』は2007年５月、イコモスから世界遺産登録について「延期」勧告を受けたものの、その鉱山経営が自然と共生し、当時から既に環境への配慮が行われていたことなどが再評価され、同年７月の世界遺産委員会では、国内で14番目となる世界遺産に逆転登録された。

その構成資産は、鉱山そのものだけでなく、周辺に残る城跡や採掘した銀の積出港と鉱山とを結ぶ２つの運搬道（石見銀山街道）とその港（鞆ケ浦と沖泊）、重要伝統的建造物群保存地区（略称：重伝建）に選定されている旧鉱山町の大森銀山と銀の積出港・沖泊の近隣にある温泉津町の２つの町並みなど、広範囲に渡る。

世界遺産「石見銀山とその文化的景観」の範囲



※石見銀山世界遺産センターHPより

Ⅱ.『石見銀山遺跡とその文化的景観』の現状と課題

1．現状

①資産の保全と活用

石見銀山遺跡を官民協働で保全・活用すべく、2005年に島根県と大田市職員、大田市民による任意団体“石見銀山協働会議”が組織された。その活動方針として、同年策定された「石見銀山行動計画」では、５つの課題とそれに対する解決の方向性が示されている（図表１）。

図表１　石見銀山に関する課題と解決の方向性

課　題	解決の方向性
石見銀山を守る（保存管理）	・基本的な保存管理の徹底 ・石見銀山ルールの確立 ・保存管理基金の設置・運営　等
石見銀山を究める（調査研究）	・基礎的調査研究の実施 ・テーマ別　〃 ・調査研究の総合調整機能の充実
石見銀山を伝える（情報発信）	・ブランドイメージの構築 ・PR活動の推進 ・教育・普及活動の推進　等
石見銀山に招く（受　入）	・ガイダンス機能の充実 ・アクセスルートの整備 ・安全対策の充実　等
石見銀山を活かす（活　用）	・石見銀山ツーリズムの推進 ・伝統文化の振興 ・空家活用の推進　等

※「石見銀山行動計画」より抜粋

このうち、「石見銀山を守る」という課題解決の方向性のなかにある“保存管理基金の設置・運営”については、早速、石見銀山基金募金委員会を組織して石見銀山基金を立ち上げた。この基金は、その主目的である遺跡の維持・保存活動に加え、文化財等の修理・修景活動や伝統文化の保存・活動など、石見銀山遺跡に関連する保存活動全てに適用できるものとしている。大田商工会議所を中心に１口あたり法人１万円、個人千円の募金活動が行われ、2013年までに寄付金総額３億円を目指すものであったが、2011年にはその目標額を達成した（図表２）。

図表２　石見銀山基金集計表

（千円）

年		2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	総計
民間寄付件数		12	458	138	92	70	81	37	888
寄付金額	民間	3,003	37,823	32,865	90,516	54,362	15,824	3,296	237,689
	行政	5,997	26,678	35,344	34,416	21,876	25,689	0	150,000
年　間　額　計		9,000	64,501	68,209	124,932	76,238	41,513	3,296	387,689

※NPO法人石見銀山協働会議HPより当研究所にて作成

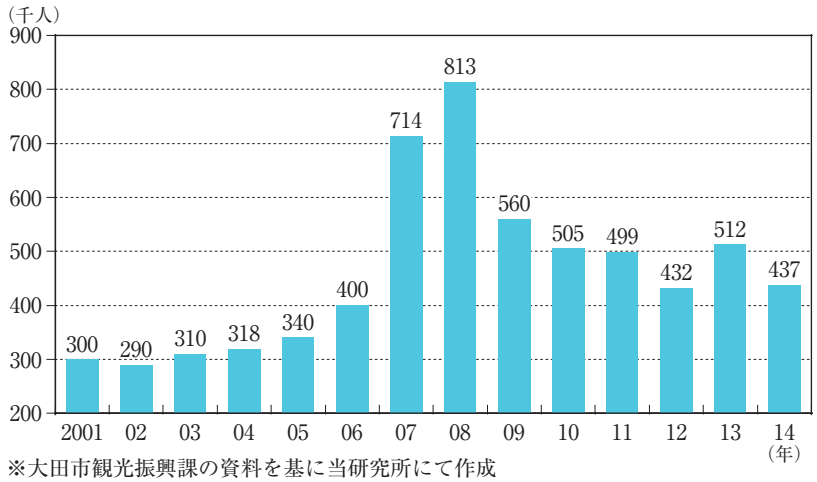
一方、2007年の世界遺産登録を経て、石見銀山行動計画を検証し基金の活用を推進するために、2010年には任意団体であった石見銀山協働会議を法人化し「NPO法人石見銀山協働会議」を設立、現在は当該基金の取り扱いを同NPO法人で行っている。

※石見銀山基金募集チラシ

②観光客数

石見銀山への観光客は、世界遺産登録が現実味を帯びてきた2006年に、それまで30万人前後で推移していたのが40万人へ増加、登録となった07年には一気に70万人を突破し、翌08年にはピークとなる80万人超えを記録している。しかしながら、同年10月に周辺住民への配慮と観光客の安全性の確保を目的に、観光客が入坑可能な坑道・龍源寺間歩（まぶ）までのバス運行を廃止して「歩く観光」に転換したことに加え、世界遺産認定ブームの落ち着きもあり、認定３年目の09年には前年を３割下回る560千人となった（図表３）。

図表３　石見銀山観光客数



※大田市観光振興課の資料を基に当研究所にて作成

また、世界遺産の認定は外国人の来訪も期待されるところであるが、ここ石見銀山を訪れる外国人はまだ少なく（図表４）、大田市観光振興課によると、欧米人よりもアジア、それも台湾からの観光客が多いとのことである。

図表４　石見銀山への外国人入込客数

（人）

年	2009	2010	2011	2012	2013	2014
入込客数	904	1,585	1,296	1,808	1,644	2,339

※大田市観光振興課の資料を基に当研究所にて作成

③観光ガイド

石見銀山を案内する「石見銀山ガイドの会」は、世界遺産認定から７年前に遡る2000年に地元有志により結成されている。当初はボランティア活動であったが、財政的に独立運営を保つ目的もあって2006年に有償ガイドとなった。各ガイドが受け取るガイド料については、45％をガイドの会へ納めることになっている。このように、ガイドの会は完全民間組織として補助金等を受けずに全てガイド料によって運営されており、行政が介入していないこともあり、自分達で何とかしようという意識が非常に

ガイド募集チラシ

回覧

あなたも世界遺産を案内してみませんか？

石見銀山ガイド養成講座受講生募集

＜期　　間＞ 平成26年7月8日（火）～平成26年11月30日（日）
＜募集定員＞ 20名
＜受 講 料＞ 2000円（保険料を含む）
＜受講条件＞ 下記の講座に原則として毎回出席し、講座終了後に石見銀山ガイドとして活躍する意欲のある方。
＜年　　齢＞ 年齢は問いません。
＜そ の 他＞ 趣味や教養を目的とした受講はご遠慮ください。

＜問い合わせ先・申し込み先＞
「石見銀山ガイドの会」まで
電話 0854-89-0120　FAX 0854-89-0706

講座内容

第1部　座学とウォーク実習

No	月／日	時　間	講 座 内 容
1	7月 8日（火）	18:30～20:30	開講式／ガイドとは／受講・実習の心得ほか
2	7月15日（火）	18:30～20:30	世界遺産とは／石見銀山と世界遺産
3	7月22日（火）	18:30～20:30	石見銀山の歴史
4	7月27日（日）	9:00～13:00	ウオーク実習（銀山地区）
5	8月 3日（日）	9:00～13:00	ウオーク実習（大森地区）
6	8月19日（火）	18:30～20:30	温泉津の歴史
7	8月24日（日）	9:00～15:00	ウオーク実習（温泉津地区）
8	9月 2日（火）	18:30～20:30	仁摩の歴史
9	9月 7日（日）	9:00～15:00	ウオーク実習（仁万／宅野／馬路地区）
10	9月16日（火）	18:30～20:30	石見銀山の鉱床と銀の生成
11	9月21日（日）	9:00～12:00	ガイド実習（銀山地区）
12	9月28日（日）	9:00～12:00	ガイド実習（銀山地区）
13	10月 5日（日）	9:00～12:00	ガイド実習（大森地区）
14	10月12日（日）	9:00～12:00	ガイド実習（大森地区）
15	10月12日（日）	13:00～15:00	閉講式／ガイドの心得

第2部　トレッキング実習　（第1部修了者で、ガイドの会入会者を対象に実施します）

1	11月 2日（日）	9:00～13:00	山吹城山周辺
2	11月 9日（日）	9:00～13:00	本谷、石銀、清水谷周辺
3	11月16日（日）	9:00～15:00	銀山街道　温泉津沖泊道
4	11月23日（日）	9:00～15:00	銀山街道　鞆ヶ浦道
5	11月30日（日）	9:00～15:00	銀山街道　やなしお道

「石見銀山ガイドの会」
島根県大田市大森町イ824-3
電話 0854-89-0120　FAX 0854-89-0706

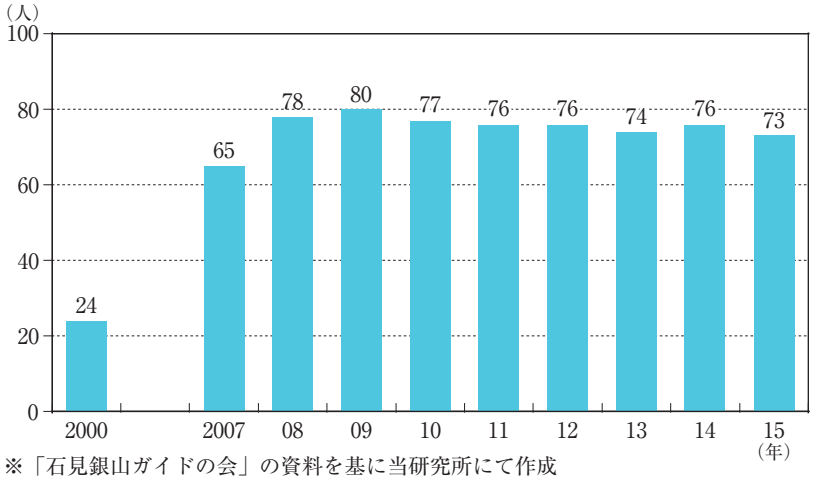
※資料提供：石見銀山ガイドの会

強い。

当会の特徴は、正会員が全員、必ずガイドを行うことにある。ガイドは毎月、翌月のガイド可能日の自己申告を義務づけられており、今年（2015年）の会員数は正会員61人、準会員８人、顧問４人の計73人である（図表５）。ガイドは大田市を中心に募集を行っており、養成講座を受講し、検定試験に合格した人がガイドとして活動する。

また、ガイドの会では地元に支持される組織を目指しており、高齢化が著しい大森町の清掃活動をはじめとする地域活動にも積極的に参加するなど、町の人との信頼関係の構築にも努めている。

図表５　「石見銀山ガイドの会」会員数推移

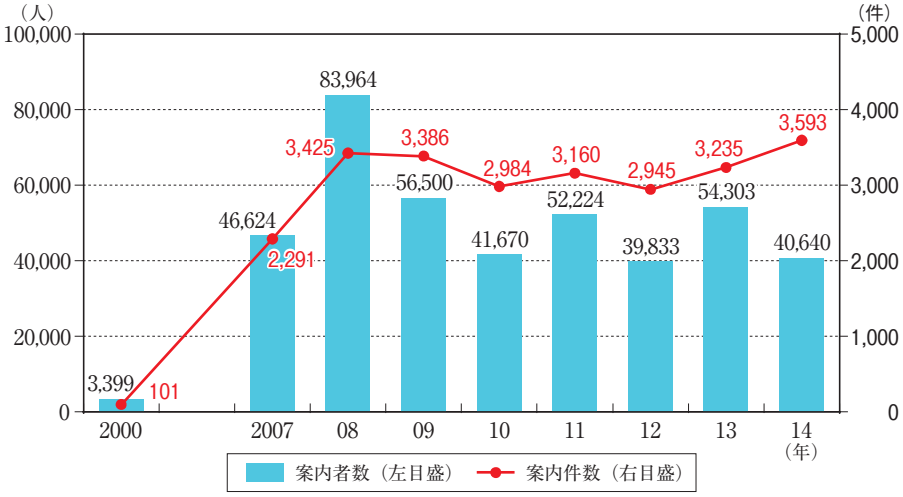


※「石見銀山ガイドの会」の資料を基に当研究所にて作成

当会に所属するガイドの半数が別に生業を持っており、残り半数が定年退職組である。会では毎月１回、２時間の定例会を開催しているが、そのうちの１時間は、外部講師を招いたガイド研修の時間に充てている。この定例会へのガイドの出席率は８割前後を誇っており、会員の士気は非常に高い。因みに、昨年（2014年）６～９月にかけてガイドの会が行った観光客へのアンケート（回収率は２割弱、300件近くを回収）では、会員による案内が「つまらなかった」とした回答はなく、「とてもよかった」との回答が８割以上を占めるなど、観光客の評価も高い。

次に、ガイド実績をみると、世界遺産認定翌年の2008年度がピークとなっており、当時はガイドが足りず、断ることもあったという。その後をみると、2011年度は東日本大震災の発生による代替需要により増加、2013年度の増加要因は出雲大社の60年ぶりとなる「平成の大遷宮」によるものだが、翌14年度は再び例年並みとなっている（図表６）。

図表６　「石見銀山ガイドの会」によるガイド実績



※「石見銀山ガイドの会」の資料を基に当研究所にて作成

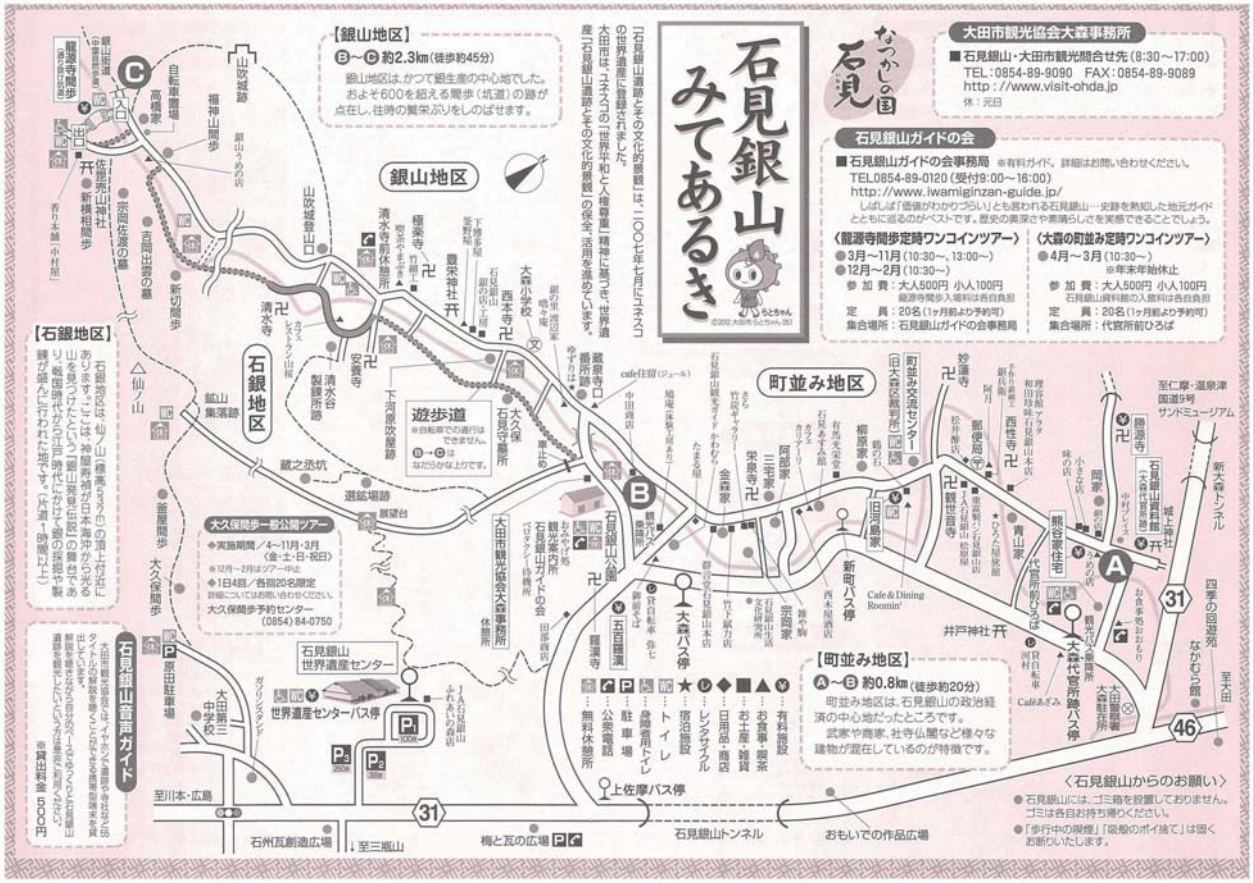
２．課題

①情報発信

『石見銀山遺跡とその文化的景観』では、どうしても“銀山”が前面に出るため、その後に続く“文化的景観”には観光客の関心が向きにくいことが課題となっている。また、銀山そのものについても産業遺産観光の課題とされる、知識不足の観光客にどう情報発信、対応していくのかが関係者の悩みとなっている。

大田市役所では、ある旅行冊子の調査で示された「石見銀山遺跡の観光客滞在時間は平均２時間半弱」という結果について、「当遺産の認定エリアの広さと、各構成資産の奥深さから、観光客が石見銀山とその関連遺産の本当の醍醐味を味わないまま帰ってしまっていることがよくわかる」としている。当遺産を訪れる主な観光客は、“石見銀山を観る”として徒歩で片道40分程度かかる龍源寺間歩まで行って坑道の中に入り、帰ってくるコースを選択することが多いが、実はこれだけで調査にある２時間近くかかる。大森や温泉津の町並みなど、他の構成資産にまで足を伸ばす人は少なく、また、銀山への滞在時間を２時間程度しかとらない旅行ツアーが多いことも影響している。

まちあるきマップ



龍源寺間歩入口

龍源寺間歩内部

大森の町並み

「山陰合同銀行 大森代理店」町並みに溶け込んでいる

②観光客の減少

石見銀山の観光客は、世界遺産認定ブームの後に急激に落ち込んだ（【図表３】参照）が、それでも認定前と比較するとプラス10～20万人で推移しており、落ち着いた状況にある。観光客が落ち込んだ理由については「歩く観光」への抵抗感などが影響したのではないかともいわれているが、毎日現場に携わっている石見銀山ガイドの会の安立会長は、次のような感想を持っている。

要因①：旅行会社の募集型ツアーの減少

2012年、国交省が高速ツアーバスの運転手１人当たりの運転可能距離の上限を400㎞と定めてから、これまで石見銀山まで足を伸ばしていたツアーバスが、出雲市止まりになってしまっている。また、ツアー料金も１万円以上値上がりした。

要因②：石見銀山はわかりにくい世界遺産

世界遺産ということで、どれだけ凄い所なのだろうかと期待して訪れた観光客が、坑道まで歩いて行って坑道内を歩く、また町並みも歩く・・“歩くだけ”とがっかりして帰る人も少なくない。マイナスイメージを持ったまま帰る人もかなり多く見受けられ、石見銀山に対

して悪印象をもつ人を毎日増やしている状況にある。

この２つの問題に関して、安立会長は次のように語っている。まず要因①について「減ってしまったのはどうしようもないので、来てくれた観光バスの乗客に対して、ガイドの会では予約をしていなくても簡単な無料ガイドを行い、少しでも多くの人に石見銀山の世界遺産としての魅力をわかってもらうよう努力し続けている」。また、要因②については「ガイドを増員して案内回数を増やすなど、もっとガイド活動に力を入れるべきだと実感している。特に産業遺産では、ガイドが帯同しなければ観光客もここが世界遺産にふさわしい場所だということが理解できない、と確信している」。

③観光ガイドの課題

石見銀山ガイドの会ではいくつかの課題を認識しており、そのうちの１つがガイドの高齢化である。2015年現在、ガイドの平均年齢は68歳になっていることから、若者の加入を促していきたいとしているものの、その対応策がまだ見つかっていない。

また、会の存続を左右する収入面については、これまでの有償ガイドとは別に、島根県と大田市からの委託事業として龍源寺間歩への案内（県）と大森の町並み案内（市）についての定時無料ツアーを行っていたが、同事業が2013年をもって終了（もとは山陽方面からのバス利用観光客の誘客事業であり、これが思ったように伸びなかったことによるもの）したことで、会の運営が一気に厳しくなった。これを受けて、14年から500円ワンコインツアー（小中学生は100円）を始めており、昨年は約8,000人の利用があるなど、会の財政に貢献している。しかしながら、15年度は５月現在、ワンコインツアーの利用者は前年比110％と好調なものの、ガイド全体の利用者が例年の８割程度であったことから、このままでは14年度の人数を下回ることが予想され、前年度並みを確保するよう各方面へアピール中である。

④石見銀山までの交通アクセス、認定地域内におけるアクセス

石見銀山のある大田市大森町に行くには、JR大田市駅より１日19本の路線バスが運行されているものの、列車の本数は多い時間帯でも１時間に２本と少なく、また、山陽方面からのアクセスとなる広島駅から大森町への直通バスも、１日朝夕１本ずつの計２本しか運行されていない。また、大森町に加え、温泉津町や鞆ヶ浦など世界遺産認定地域全体を効率的に回るとなると、どうしてもレンタカーなど車の方が利便性は高く、当遺産は、車を利用しない人にとって少々敷居が高い。さらに、現地もバスを廃止した「歩く観光」への転換により、高齢者や障害者にとっては敷居が高い世界遺産となってしまった。この点については行政も認識しており、早くから対策が検討されてきたものの、現在までその有効策を打ち出せないでいる。

⑤石見銀山基金の活用

NPO法人石見銀山協働会議によると、石見銀山基金の目標額は既に達成しており、その資金の有効活用が必要となっているが、その利用が芳しくない。文化財修復費用の話などが民間から持ち込まれるものの、申請先は大田市となっており、手続きが少々煩雑となってしまうことも要因とみられる。いずれにしても、今後は具体的な活用先を増やしていくことが必要であり、これが近年減少傾向にある寄付件数と金額の増加にもつながるものと期待している。

⑥宿泊は主として大田市外

大田市観光振興課によると、石見銀山への観光は、出雲大社や松江城など、他の島根県内観光地と絡めている人が多い。その宿泊は、大田市内ではなく、宿泊施設の種類が多い松江市や出雲市、松江市の近隣にある玉造温泉を利用しているとのこと。このように、最も消費単価が大きいとされる宿泊客が少数にとどまると地元への経済効果が限定的となることから、宿泊客の増加が課題となっている。

Ⅲ．世界遺産の町にある民間企業の取組み

石見銀山の鉱山町であった大森町は、町全体が銀山とともに世界遺産の構成資産であるが、これは、町の人々自らが銀山遺跡と町並みの保存を行い、地域の価値を高めてきた成果であるともいえる。当地には、㈱石見銀山生活文化研究所と中村ブレイス㈱という全国的にも有名な企業がそれぞれ本社を構えており、この２社の地元への貢献は特筆すべきものがある。石見銀山生活文化研究所は、石見銀山のスローライフをイメージした服飾ブランド“群言堂”を全国展開しており、中村ブレイスは、医療用義肢装具で世界にもその名を知られる会社である。今回は、この中村ブレイスの石見・大森地区への取組みを紹介する。

１．町並みの保存

中村ブレイス㈱　中村俊郎社長

中村ブレイスは、大森町出身の現・代表取締役社長中村俊郎氏が1982年に設立（創業は1974年）した医療用義肢装具の製造・販売会社である。その製品は人工乳房をはじめ、義手、義指など、そのどれもが本物そっくりと評判であり、国内をはじめ海外にも輸出されている。

中村氏は、地元の高校を卒業後、京都の義肢装具製作所に就職、その後渡米してレベルの高い義肢装具の製造技術を学んだ。その後、これまでにないレベルの義肢装具を製作する会社を日本に立ち上げるべ

く帰国し、生まれ故郷の大森町に貢献しようと同地にて起業したのである。

中村社長は、まず大森町に残る町並みの統一感を維持しようと、会社が軌道に乗り始めた創業10年目から、現在までつながるまちおこし事業に取り組み始めた。そのうちの１つが、町に残る古民家の改築である。古民家の改築には、通常の家屋の改築と異なり、元の素材を活かす方法を採用しており、対象家屋に残るまだ使える材料を極力使用しながら、外見は昔のままとし、中には近代住宅設備を導入している。この、以前の姿を極力維持したままの古民家改築は、その後、1987年に大森の町並みが重伝建に選定されたことからみても、中村社長に先見の明があったといえよう。

※古民家改築例：天井には元からある梁をそのまま使用

２．公共施設の設置

中村ブレイスでは、通常の家屋改築だけでなく、道向いにある2010年復元の銀山付地役人居宅「渡辺家住宅」とデザインを合わせたゲストハウス「ゆずりは」を2011年にオープンし、大森町における数少ない宿泊施設の１つとして地域に貢献している。また、2014年には会社の創業40周年事業として、旧・大森郵便局舎を改築した世界一小さなオペラハウス「大森座」をオープン。今年（2015年）の８月にはフランス国立オーケストラの首席演奏者を招き、サマースクールを開催する予定である。

ゲストハウス「ゆずりは」

オペラハウス「大森座」の外観とその客席

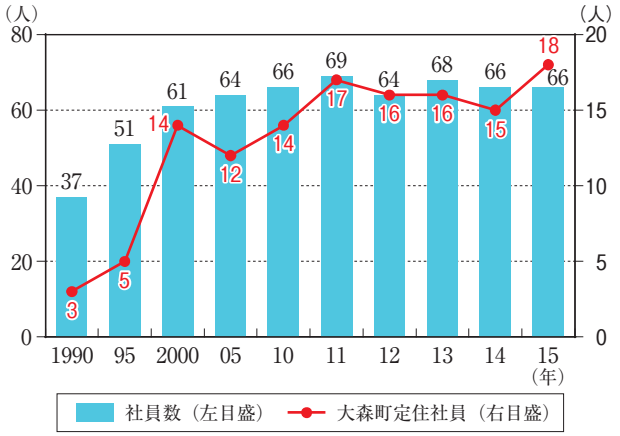
他にも、大正時代に松江市から大田市に移築されていた山陰合同銀行の前身、旧松江銀行本店の建物の活用がある。取り壊しが決定していたが、中村社長が2000年に大森町に移築・改修し「なかむら館」として再生した。ここには、石見銀山が世界遺産であることを証明するために、中村社長が30年間かけて個人的に収集してきた関係資料や世界各地の古地図などのコレクションが所蔵されている。

３．町の人口維持に貢献

古民家の改築ペースは余裕を持ちながら進めてきており、これまで47軒の改築を行っている。このなかには、会社の独身寮や社宅なども含まれているが、これは、中村社長の「地域を支えるためには若者の大森町への定住が必要」との思いに起因している。

中村ブレイスの従業員66人のうち、３割近い18人が会社近くの古民家を改築した趣のある社宅に住んでいる（図表７）。なかには子供がいる家庭もあり、町の人口減と少子高齢化にストップをかける役割を果たしている。大森町の2015年の人口は前年比プラスに転じており（図表８）、また、地元小学校の児童数もここ数年は20人前後で推移している（図表９。因みに、2014年在籍の児童19人のうち、同社に関係する児童は11人を数える）。

図表７　中村ブレイス㈱の社員数と大森町在住者数



※資料提供：中村ブレイス㈱

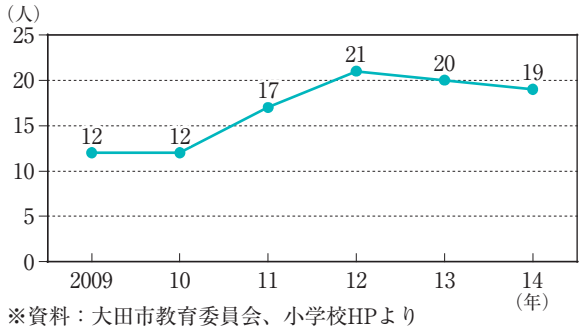
図表８　大森町の人口

（人）

年	2000		2005		2010		2014		2015	
大田市全体	42,573		40,703	（対前回調査比）△4.4％	37,996	（対前回調査比）△6.7％	37,328	（対前回調査比）△1.8％	36,895	（対前年比）△1.2％
（内、大森町）	（472）		（449）	△4.9％	（405）	△9.8％	（405）	0	（408）	＋0.7％

※各年10月１日現在、2015年のみ７月１日。2000～10年は国勢調査、14、15年は住民基本台帳による

図表９　大森小学校児童生徒数



※資料：大田市教育委員会、小学校HPより

Ⅳ．世界遺産認定後を見据えて

長崎県初の世界遺産『明治日本の産業革命遺産　製鉄・製鋼、造船、石炭産業』は数年間、世界遺産ブームにより、交流人口の拡大に大きく貢献することとなろう。しかしながら、そのブームが終わると、訪れる人の数が急激に落ち込むことが予想されることから、今のうちに数年後を見越した対策、活動を行わなければならない。

2007年に世界遺産に認定された石見銀山をみると、さまざまなことが浮かび上がってきた。これらは、同じ産業遺産の世界遺産認定後の流れを見据えるにあたり参考となろう。

①観光客は新しいもの好き。観光客数は、遺産認定から２、３年の間がピーク。

②観光客はピーク後に落ち込むが、世界遺産認定前との比較では増加しており、認定効果は健在。

③構成資産を維持するための専用基金を設けているが、その利用手続きが煩雑。

④目標金額を達成していることもあり、基金への寄付件数・金額とも、世界遺産認定から時間の経過とともに減少傾向。

⑤産業遺産観光は、観る方にある程度の知識を要求する。石見銀山では、人口の坑道・間歩を訪れる観光客のなかに自然洞窟である山口県の秋芳洞と比較する声（秋芳洞に比べると狭くて小さいなどと、不満ともとれる声）もたまに聞かれるとのこと。資産の価値をきちんと説明できるガイドによるフォローは必須である。長崎県をみても、軍艦島クルーズを運行している会社から「軍艦島が廃墟と化した理由を未だに知らない観光客をたまに見かける」との声も聞かれる。

⑥ガイドの高齢化が著しい。またその組織を維持するための自主財源の確保は難しく、時には行政の協力も必要。

⑦産業遺産には、石見銀山でいえば鞆ケ浦や沖泊の港といった目立たず、現場を訪れてもイメージが湧かない資産も多く、情報発信が重要。長崎の構成資産では「北溪井坑跡（ほっけいせいこう）」などがそれに該当する。

⑧交通弱者のためにも、わかりやすく、利用しやすい交通アクセスの整備が必要。

⑨地元民間企業の協力も侮れない。構成資産の維持・管理のみならず、地域全体が活気づくことにもつながる。

おわりに

国内の世界遺産が増えていくなか、既認定遺産は年月が経過すると人々の関心が薄れ、集客面で厳しくなる傾向にある。石見銀山は認定から８年が経過しており、ピーク時にはバスの乗車に行列ができていたものが、今では余裕を持って回ることができる。これはこれで、地元住民にとっては日常生活が静かになることから、現在の状況が適正なのかもしれない。当時の暮らしが今も生活のなかに息づいていることが世界遺産認定の要素となっているのが石見銀山であり、そこに観光と住民生活との調和が求められている点において、長崎県が来年の世界遺産登録を目指している『長崎の教会群とキリスト教関連遺産』に近いものがある。

２時間の滞在時間ではその魅力が伝わりにくい『石見銀山遺跡とその文化的景観』であるが、その真の魅力に触れた人のなかには訪問６回目という人もおり、そのような石見銀山ファンは、毎回違う人を一緒に連れてきて、石見の良さを広めてくれているとのことであった（石見銀山ガイドの会・安立会長談）。どの地域も同じであるが、訪れてくれた人に「行ってよかった！」と思わせるように仕向ける仕掛けやおもてなしが肝要となる。

世界遺産に認定されると終わりではなく、特に産業遺産は認定されてからもその価値をきちんと伝え続けることができなければ、「何故これが世界遺産？」と思われがちなものも多い。訪れた人を落胆させないための見せ方や情報発信の工夫が求められる。

（杉本　士郎）